



ご挨拶

第33回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会

会長 細野 茂春

自治医科大学附属さいたま医療センター 周産期科新生児部門 教授

第33回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会は、2023年(令和5年)6月9日(金)～10日(土)に埼玉県さいたま市埼玉会館にて開催します。

2019年12月に中国武漢で一例目のCOVID-19が報告され我が国でも現時点で感染流行の終息が見通せない状況が続いています。昨年度第32回学術集会はオンサイトで開催し、多くの参加者が会場に足を運ばれて盛会裏に終わりました。

学術集会は特定分野や学術内容に興味のある人を対象とした集まりです。インターネットを介して様々な方法で最新の情報を得ることが出来ようになりましたが、オンサイトで学術集会を開催する意義は意見交換ができる場を提供することに尽きると思います。COVID-19感染状況を予測することは困難ですが現時点ではオンサイトのみで実施する予定で考えており、できるだけ多くの方の現地への御参加をお願いしたいと考えております。

本学会は産婦人科・新生児血液学会ではありますが、新生児のみならず小児領域の血液・腫瘍関係の疾患についても幅広く議論する場になってきています。私は新生児集中治療を中心に臨床を行ってきました。集中治療は呼吸・循環が中心ではありますが、ヒトが生体恒常性を維持するには組織へ酸素と栄養の運搬が必須であり、それを達成するのは赤血球をはじめとする血液を抜きに語ることは出来ません。

2010年に産科的危機的出血への対応ガイドラインの策定とエビデンスに基づいた改訂作業と日本母体救命システム普及協議会が中心となって周産期医療関係者に標準的な母体救命法の講習会実施により妊婦の死亡は世界で最も少ない国としての位置をキープしています。

小児科領域全体としては血液・腫瘍学は着実に進歩してきていますが、新生児に関する疾患に関してはまだまだ大きな課題を残しています。一例を挙げれば成分輸血のトリガー値に関しても十分なエビデンスがないままです。平成31年3月に改訂された血液製剤の使用指針には“小児一般に対する輸血製剤の投与基準については、いまだ十分なコンセンサスが得られているとは言い難い状況にあり、新生児・小児は多様な病態を示すため個々の症例に応じた配慮が必要である”と記載されています。出生数の低下に伴い研究対象患者が減っている現状で研究の停滞が見られている面があります。そういった現状をふまえて今回のテーマは「血液のおもしろみを伝えよう」としました。若い世代の先生方が産婦人科領域・小児領域での血液に関する病態・疾患の奥深さに触れて、興味を持って研究を進めていただければと思います。一人でも多くの皆様の参加をお待ちしています。